

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：34315
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2011～2014
 課題番号：23730504
 研究課題名(和文) 在日朝鮮人学生団体に見る「祖国」意識 1960～70年代を中心に

 研究課題名(英文) National Identity of Korean Student Association in 1960-70's

 研究代表者
 金 友子(KIM, Wooja)

 立命館大学・言語教育センター・嘱託講師

 研究者番号：20516421

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本に居住する在日朝鮮人のうち、韓国を自らの国とする学生団体の、1960年代から70年代における思想と行動を考察することを目的とした。研究期間内には、第一に資料収集とその保存のための電子化、第二に収集した資料を読み込み彼ら・彼女らの思想と行動を記述・分析をおこなった。さらに当時活動していた人物への聞き取り作業も実施した。資料は約500点の存在が確認され、そのうち貸与可能なものは電子化した。分析の結果、彼ら・彼女らは無条件の「祖国」に同一化していたのではないこと、また、祖国意識形成の装置として母国訪問団や翻訳資料など、「祖国」との物理的・時間的距離を埋める装置の存在が確認された。

研究成果の概要(英文)：This study aims to explore the ways an ethnic community in Japan constructs its national identity focusing on a student's group of Koreans, who identified themselves with South Korea, in 60-70's and describe its history. Tracing its history based on the resources and interviews with the members of the group, it is revealed that their national identity cannot be explained well enough by the assertion of essentialist identity, but is constructed and maintained in the interaction between the Homeland, South Korea, through collective acts of solidarity with the student movement to democratization in South Korean society, and that "back home journey" and translated materials from Korea affected their sense of belonging.

研究分野：在日朝鮮人史

キーワード：ナショナリズム アイデンティティ 祖国 在日朝鮮人 エスニシティ 学生運動 ディアスポラ 帰属意識

1. 研究開始当初の背景

近年、在日朝鮮人のアイデンティティ研究は盛んに行なわれている。アイデンティティに関する研究一般において、アイデンティティは固定的なものではなく流動的なものであるとか、異種混血的、可変的なものであるということが明らかにされてきたことを受けて、在日朝鮮人のアイデンティティ研究の中でも、「多様化」や「多様性」がキーワードとして浮上している。しかし多様性を称揚するあまり、「祖国」に対する意識は「民族」を本質化する抑圧的なものであると批判的に捉えられる傾向にあった。また、世代交代を経るなかでの「多様化」を捉えようとした研究は多いが、それらは主に三世を対象としており、二世世代の研究の層は薄かった。

本研究の学術的背景としては、A) 在日韓国人・朝鮮人についての実証学的研究で主に資料発掘を中心としてきた歴史学と、B) それらの人々の自己意識を分析してきた社会学の流れがある。そして理論的背景としてはC) 移民のアイデンティティやナショナリズムを論じたものがある。

A) および B) は、在日韓国人・朝鮮人がどのような歴史的背景のもとで生み出され、日本社会の中でどのような生活を送り、活動してきたのかを明らかにしてきた。

とりわけ A) 歴史学の分野では、近年、1950年代の祖国意識（小林知子 2002）や戦後直後の青年活動家の主体性（鄭栄桓 2005）などが論じられている。だが、60年代以降についての研究は皆無に近い。また、B) 自己意識や帰属意識に関する社会学的研究に関しては、90年代以降、アイデンティティ形成について論じたものが登場し始め（福岡 1993；金泰泳 1999）90年代後半になってようやく「意識」に関する調査が行われた（福岡・金 1997）。福岡・金（1997）は、在日朝鮮人の志向性が、世代交代を経るなかで多様化していると指摘している。2000年代にはエスノグラフィー形式で、多様化する在日朝鮮人のアイデンティティが分析されている。しかし「多様性」を称揚するあまり「祖国」に対する意識は「民族」を本質化する抑圧的なものであると批判的に捉えられる傾向にある（金泰泳 1999）。

しかしながら、これらの研究は 80年代以降の日本への「定着」が前提とされた世代を分析対象とし、祖国志向と在日志向を二項対立的に捉え、祖国志向を所与のものとして見做している点で、在日朝鮮人の自己意識の形成を捉え損ねていると考えた。とりわけ、居住国に生まれ育った「移民」が「祖国」へのナショナリズムを抱くという現象が説明されていない。

この着想を得た C) 理論的背景としては

移民のアイデンティティやナショナリズムを論じた膨大な研究蓄積のなかでも、移民がホスト社会に居住しつつも「祖国」に対して様々な形で関与を保とうとすることを概念化した B. アンダーソン（1993）の「遠隔地ナショナリズム論」である。アンダーソンは、母国から遠く離れていながら文化の共有を実感するには、何らかの「場」が必要であることを指摘した。

その「場」として注目したのが「在日韓国学生同盟」という大学生の組織である。同組織は戦後間もなく発足した朝鮮人留学生の学生組織から派生したが、先行研究で明らかにされているのは成立の経緯にとどまる。また、直接関連するものとして鄭雅英（2008）が韓国学生同盟の下部団体の活動を考察しているが、他は皆無である。公刊された資料としては、『在日朝鮮人関係資料集成 戦後編』第3巻しかなく、同資料集の「改題」（宮本正明）で言及しているにすぎない。応募者は、60年代、70年代の時代状況の中に当時の在日韓国人学生の思考と意識を位置づけることで、それらがもつアイデンティティを立体的に明らかにすべきだと考えた。

2. 研究の目的

在日朝鮮人のアイデンティティを論じた既存の研究は、70年代以降の第二世代にのみ注目しがちで、それ以前は祖国の記憶をもつ「一世」として括られ、「二世」への移行の過程および二世の自己意識の複雑さが捨象されている。本研究は、独特な目的意識をもった学生の組織に焦点を当てることで、彼らのナショナリズムやエスニシティがどのような影響のもとで、どのように形成されたのかを具体的に明らかにすることを目的とした。

また、関連史料がどれだけ残っているのかを発掘し、保存することも目的とした。実際、これまでの研究蓄積の少なさは資料的限界に起因している。資料の消失・散逸が激しく、収集・保存作業そのものが喫緊の課題である。

さらに、分析の理論的枠組みとして近年のエスニシティ論、アイデンティティ論およびナショナリズム論などを用い、理論の適用可能性をさぐりつつ、現実世界の事象から再度理論を練り直すという方法をとることで、上記の諸理論の蓄積に貢献することを目的とした。

3. 研究の方法

資料調査（発掘・整理）とアーカイブ化、および分析を主な方法とした。

(1) 資料の調査と発掘

対象団体が定期・不定期に刊行していた雑誌、新聞、資料集、ピラなどを収集していった。そのほとんどが個人所蔵なので、対象となる団体に所属していた人々や関係をもって別々の団体などを探し、どこに、どのような資料が、どれだけ残されているのかを確認した。

外交事案になった事柄に関しては、韓国の外交史料館を訪問し、マイクロフィルムのコピーというかたちで入手した。

(2) アーカイブ化

膨大な紙媒体では散逸の可能性があるため、収集した資料をリストにし、スキャンして電子化した。

(3) インタビュー

文献のみでは把握しがたいことについては聞き取り調査を行なった。インタビューは一对一の対面で、対象者のライフストーリーに同団体での活動を位置づけるかたちで語ってもらった。

(4) 分析と検討

分析については、集めた資料を用いて 60年代から 70年代の在日韓国人学生の意識を浮き彫りにすることを試みた。とりわけ、「祖国」「母国」にかかわる言説や、自らの民族性を語っている部分に注目した。

さらに、資料には多くの情勢分析が掲載されているが、それらについても、彼ら・彼女らがどのように時代を認識していたのかを把握する材料として扱い、自らを時間的・空間的にどのように位置づけようとしたのかを析出した。

これらの結果を、他の文献などを用いて、当時の時代状況に位置づけていった。また、理論的枠組みについては文献研究をおこなった。

4. 研究成果

(1) 資料発掘と収集・アーカイブ化

同団体の発行物として、機関紙(新聞)、機関誌(大学ごとや地方ごとに作成)、行事などの際に出される冊子や学習資料、同団体内部につくられた同人誌などがあることがわかった。また、数点の会議資料も発見された。計約 500 点の資料の存在が確認された。そのうち貸与可能なものは電子化が完了した。

しかし収集できた資料には地方的偏りがあり、また、定期刊行物も通巻でそろっているものはほとんどない。今後も資料の所在確認と発掘作業が要される。

(2) 資料および聞き取り調査の分析

本研究は、60-70年代における在日韓国学生同盟という学生団体の存在とその活動を明らかにすることを目的としていた。全貌とはいえないまでも、韓学同という組織とその活動の一端を明らかにした。

60年代の彼ら・彼女らは本国の民族民主主義運動に連帯し支援するとともに、在日同胞の権益擁護運動を活動の軸としていた。権益擁護運動では、日本政府に直接異議申し立てをするというよりは、本国政府(韓国社会)その一部である民団(「民団社会」と彼ら・彼女らは呼ぶ)に訴えていた。ここには、日本にいるというのは特殊性であって、そもそもは「韓国社会」の一員であるという自己認識が読み取れる。しかしながら祖国(本国)は彼ら・彼女らにとっては一枚岩ではない。抽象的には「韓国人」なるものへの同一化が目指されていたのかもしれないが、具体的には「愛国」学生、民族民主主義運動を行なっている学生に同一化していた。機関誌で頻繁に韓国の情勢や学生運動の動き、学生運動の歴史を紹介していることから、それは分かる。日本に存在する民族団体の二大勢力である民団と総連が、それぞれ南と北の政治権力との結合を強めていったのは異なり、「民衆」のレベルで本国と呼応しようとする潮流の先駆的存在だったといえるだろう。

もちろん、団体内部で祖国への思い/思い入れや、自らの民族性をどう捉えるかには温度差がある。ある者にとって「韓国人性」や本国学生への支援・連帯は自明であり、あるものにとっては実感のわかぬものであった。これはとりわけ大学に入学した後の1,2年生の「民族虚無意識」と3,4年生の「民族的主体性の確立」というかたちで現れている。同団体では、これを「成長」と捉え、そのために徹底的に学習・討論を行っていた。

祖国意識形成の背景に注目してみると、祖国ないし本国を身近に感じられるような状況があったことがわかる。母国訪問団、数々の翻訳(本国の人の声)は、単に情報を伝えたり共有することに留まらず、本国との物理的・時間的な距離を埋める装置でもあった。ただ、実際に「見た」からと言って「祖国」が想像上のものではなかったともいえないし、「見ていない」からと言って身近に感じられないわけでもない。移民の「祖国志向」については、

近年、「ディアスポラ」や「遠隔地ナショナリズム」といった用語で論じられており、本研究の分析枠組みとしてこれらの概念を使うことには一定の妥当性はある。しかし、日本と韓国の物理的な距離の近さ、政治的な距離の遠さ、日本との植民地の歴史や朝鮮半島の南北分断など、在日朝鮮人がおかれた「特殊」な位置も含めて、さらなる検討が必要である。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

金友子「路上の憎悪と日常の「微細な攻撃」」、『図書新聞』3198巻、2015年3月14日、p. 8、査読無

金友子「現実を描き、現実に立ち向かう映画」、『月刊イオ』朝鮮新報社、2014年6月号、pp.20-21、査読無

金友子「(書評)橋本みゆき『在日韓国・朝鮮人の親密圏』社会評論社、2010年」、『現代韓国朝鮮学会』『現代韓国朝鮮研究』第12号、2012、pp.77-80、査読無

[学会発表](計3件)

金友子「民族主義なのか、そうでないのか」、『延世大学校国語国文学科 BK21 プラス事業団第6回韓国言語・文化国際学術大会「韓国文学・文化の内と外：言語、談論、再現の歴史を問い直す」』、2014年2月6-7日、延世大学校・ウェソル館(韓国ソウル)

金友子「在日韓国人学生の祖国意識 60-70年代の学生運動の事例から」、『日本解放社会学会第29回、自由報告部会』、2013年9月8日、放送大学千葉学習センター(千葉県千葉市)

NAKAGAWA Shihoko, KIM Wooja, TAKAHASHI Shinichi, HOTTA Yoshitaro. "The Future of Identity Politics in Japan," Women's Worlds 2011, University of Ottawa, 2011年7月4日, Canada (Ottawa)

6. 研究組織

(1)研究代表者

金友子 (KIM Wooja)
立命館大学・言語教育センター・嘱託講師
研究者番号：20516421

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：